

◆記念講演 I

演 題
「次世代に
引き継いでいくもの」

講 師
鳥取県知事
平井 伸 治 氏

講師プロフィール

昭和36年9月17日生れ。

昭和59年3月東京大学法学部卒業後、自治省入省。

平成2年4月福井県市町村課長。

平成8年1月カリフォルニア大学バークレー校政府制度研究所客員研究員。11年7月鳥取県総務部長。

平成13年6月鳥取県副知事。

平成17年4月総務省自治行政局選挙部政治資金課政党助成室長。

平成19年4月鳥取県知事就任。

家族は妻と息子二人、趣味は家族のためのそば打ちと水泳。座右の銘は「人は城、人は石垣、人は堀」。

私はこの度、鳥取県の知事選挙で再選をさせていただきました。つい先週のことでございます。ようやく一週間たったばかりでございます。本当に選挙戦に当たりまして皆さまから厚いご支持をいただきました。まず心から感謝お礼申し上げます。本当にありがとうございます。

本日はこのインターシティーミーティングにわざわざ小林ガバナーがおみえでございます。それから次期を背負って立っていただきます、伊藤ガバナー・エレクトさん。さらに、このインターシティーミーティングのホストをしていただきました山内会長さんや、あるいは谷口実行委員長さん、立木副委員長さん、太田副委員長さんをはじめ、本当に大勢の皆さまのお力で今日の集まりが実現しました。心から敬意を表し、また感謝を申し上げます。このあと安岡先生から論語についてのお話があります。今日はそうした論語という観点を中心に据えながら、「これからの人づくりについて、子どもたちについて」というテーマでございます。私は安岡先生の前座みたいなものでしょうから、心安くして聞いていただければいいと思います。私も先ほど安岡先生にお会いしましたが、なかなかの別嬪さんでいらっしゃるので楽しみにしていただければと思います。素晴らしい話を聞けるんじゃないかと思います。

この度、私も選挙で選ばれたわけですが、その期間中、本当に強く感じましたのは多くの人たちが心を寄せ合って、これからの鳥取の未来を考えようとしている。それが今の鳥取県の理想だと実感をいたしました。人があっての地域でございます。特にロータリアンの皆さんは地域の中核で活躍をされていらっしゃる方々ばかりであります。今日もこうして顔を拝見しますと、あそこでお世話になった、ここでお世話になったという思い出ばかりが頭をよ

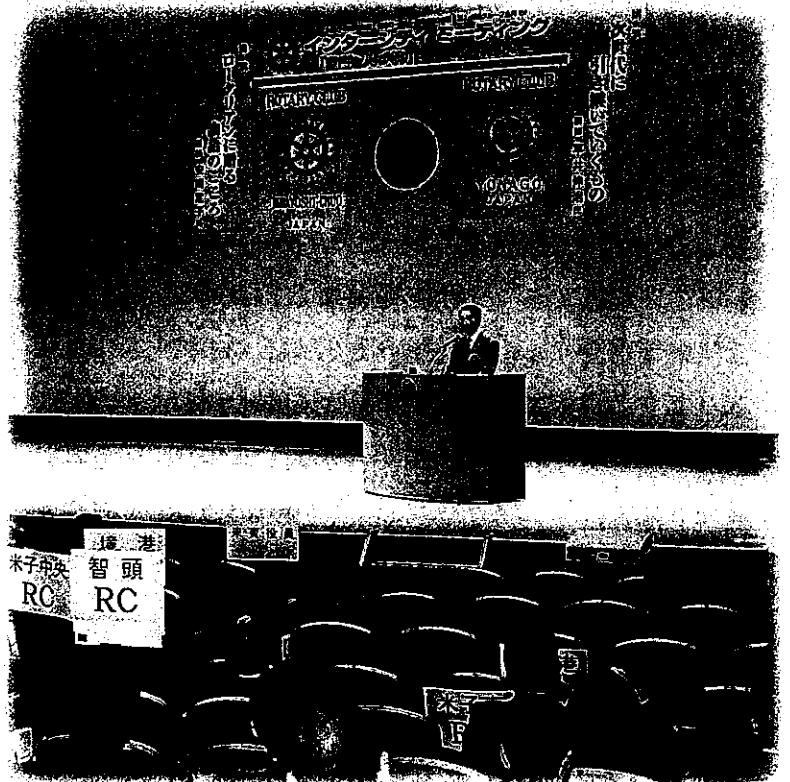


ざるわけでございます。ぜひ、これから私自身も皆さまと一緒にしまして次の4年間を素晴らしい4年間にして鳥取に活力を与え、地域の暮らしに安心を与え、そして未来をつくっていく、そういう4年間にいたしたいと思います。

この度は東北関東の地震があったり、あるいは今、少子高齢化が進んだり、さまざまな状況が生まれてきております。そういう時代の変わり目の中でどうやって次の人材をつくっていくのか。次の地域をつくっていくのか。これこそが私たちの大いなるテーマになろうかと思えます。「はてもなく葉の花つづく宵月夜 母が生まれし国美しき」、与謝野晶子さんのお歌でございます。今、ちょうど、こちらの倉吉に来る時も葉の花が咲いておりました。今年は面白いもんで、用瀬では既にツツジの便りが聞かれていました。桜もまだ散り残っているといますか、山の中に残っていたりしております。すべての花が一度にやってきたような感じがいたします。葉の花が果てしもなく続いていく、そういう宵月夜。そのときに母が生まれた国は美しい、そういう思いを読み込んだわけであり、この国の素晴らしさというものがあるわけでございます。ちょうど美しい季節になってきたと思えます。葉の花だけでなく、桜の花だけでなく、さらにツツジの花だけでなく、今、梨の花が咲いております。ちょうど、この界隈でいきますと、倉吉の少し山のほうに入ったり、東郷の方に入りますと、すっかり梨の花の白い可憐な姿があります。その梨の花、ちょうど今は授粉の季節であります。この授粉は大変な作業でございまして去年は非常にこの季節は寒かったのです。今年は寒くない。これは大きいと思えます。

去年はちょうど今の授粉のときにあまりにも寒くて授粉はするんですが実がなかなか付かなかった。それが梨の凶作につながりまして、なかなか梨が育たない。梨の実がつかないと農家の皆さんが苦労されたわけでありまして。幸い単価がよくなりまして多少は持ち直しました。それでも農家によっては大変な損害が出る状況がありました。もちろん県でもだいたい支援をいたしました。このように何事もこうやって授粉をするようなこと。いかにきれいな花が咲いているように見えましても、授粉をするようにして人を育てていく、地域を育てていくという随分と手間暇をかけなければならないと思えます。そんなことを思いながら今日はこちらにやってきたわけでありまして。

今、東北・関東の大震災や年初の雪害がございました。谷口実行委員長から、少しそういう災害の話も交えてくれということでございますので、若干のお話を申し上げたいと思えます。つい、この金曜日の夜ですか。村井宮城県知事と電話で話をいたしておりました。実は震災の晩、





3月11日から度々、連絡を取っています。彼と話をし、実は集団で移転をしようかと考える可能性があるということだったものですから、鳥取県で2,000人ほど受け入れる受け皿をつくりましょうかと、鳥取県なりに全国に先駆けた動きをさせていただきました。何せ今度の災害はあまりにも大きくて、津波も39メートル近くまで駆け上がった。従いまして昭和や明治の三陸地震を超えるものだったと、だんだんと分かってきたので、私自身も石巻にまいりました。

3月21日だったと思いますが、選挙戦に入ると多分身動きがつかなくなるだろう。選挙戦の間もこうした震災関連の公務をすることに決めていたのです。ただ、なかなか現地に行って直接話すこともやりにくかろうということでおりました。向こうにまいりまして村井さんと話をしたり、被災地の避難所を尋ねさせていただきました。避難所にはこちらの梨サイダーを差し入れに持っていったりしました。その時は県から保健師さんが健康対策で出ているんです。今は皆さんもご案内だと思いますが、衛生状態が随分悪いということでございます。実は県からも30人ばかり公務員を出しているんですが中には感染して向こうで熱が出る者もおります。なかなか厳しい状態であります。保健師さんが向こうで健康管理をするのを、ずっと延々とやっているんです。鳥取県では石巻市などを中心に行っているんですけれども、私が行きましたのは陸前稲井というところの避難所でありました。そこに県から派遣した保健師が行っているものですから、その慰労も兼ねまして現地にお伺いをしました。避難所の方々は本当に大変なご苦労をされておられます。だんだんと状況は変わってきておりますが、「私は鳥取から来ました



よ。」と言うと、びっくりされるわけです。今日の保健師もそうですけれどもと話をします。そうすると被災されたおばあさんなどが、こちらに寄ってこられて涙を流さんばかりに、「ありがとうございました。ほんに遠いところをありがとうございました。お世話になっています。」とおっしゃいました。それで何をおっしゃるかと思えば、「年明けは雪で鳥取は大変だったですよ。お見舞い申し上げます。」と言われてしまいました。あべこべだ何だかと思ったわけがあります。それぐらい被災地の皆さんは各地と心の交流に本当に思いをはせていらっしやいました。心優しいんです。むしろ自分たちはこうやって助けられているという思いもありますが、逆に鳥取から来たと言ったら、「まあ、雪で大変でしょうな。何だったら何かどうかでお助けしたい。」それぐらいのお気持ちでいらっしやいました。これが日本人の心の絆かと思いました。

そのときに保健師から、ある窮状を訴えられました。何せあまり大きな声では言えませんが、当時はあまりマスコミには出ていませんが、やはり衛生状態が悪い。例えば手を洗えないんです。プールから水をかき出して手を洗う。そのプールに入っているのは津波のときの海水です。



そんなに良い水ではありません。それを少し洗い物に使ったりとやっているわけでありす。そんなに衛生状態が良いわけではない。正直申し上げてアルコールの消毒が置いてあったので、それで防止をするわけでありす。トイレに行った後など本来は手洗いをしないと感染症が広がるのは火を見るよりも明らかであります。そういう状態でなかなか厳しい状況がございます。そこで保健師さんが思い付かれまして、うがい薬を差し入れてくれないかとおっしゃったんです。それは各地からだんだんと被災地向けの物資が集まってきてまして、ペットボトルの水が結構ある。それでうがいが衛生的にできる。せめて、そういうことで衛生状態を保っていきたくて話がありました。このようなさまざまなことを県で今、やっているわけでありす。

30人の公務員を派遣するのは村井さんとの話し合いの中で、何かできることはないかと言いました。もちろん、こちらで受け皿となって避難される方を受け入れることも始めているわけでありす。それを拡大していきましようということもあります。なかなか古里を遠く離れていくのは抵抗感がございます。今、宮城県内の人は結構、宮城県内に避難をされている。村井知事はこぼされていましたが、福島の人も宮城に逃げてきている。だから、何が何だか分からんと言っていました。人情はそういうところがございます。村ごと鳥取に引っ越したり、神戸に引っ越すのは少し抵抗感がある。だから、ある程度の人数で結構ですから出していきましよう、今、進めているんです。今、31家族が鳥取県には来ています。つい先日から鳥取県に避難された方には30万円の初動資金を提供させていただきました。これは民間のご芳志と県の公費とを足し合わせたマッチングファンド方式でやることにしたんです。これで始めたら早速、ある新聞社から1,000万円のご寄付をいただきま

して使い始めました。それから大阪の青果会社の青物市場からお金をいただいた。県内でも、そのほかにもご芳志をいただけるお話が入ってきております。そうやって、こちらに来て安心して生活ができる初動のところはやろう。まず家財道具はいろいろな物資を県民の皆さんから義援でいただいております。これが使えるようになってきました。あとは県でも買い足しをして、入居時に役立てていただいております。県で募集したら6,000人の方の応募がありました。本当に有り難いと思います。60万人の県で6,000人の応募があるわけですから、それだけ山陰の志は温かいと実感をいたしました。

いろいろなエピソードがございまして、4月6日の日に選挙中でありましたが、私は境港の青年とお会いしたんです。この境港の青年は4月7日の始業式から境港の中学校に教員として入ることになっていました。教員採用をしたんです。4月に入りました。彼は実は3月いっぱいまでは石巻で中学校の先生をしていたのです。その石巻の中学校は、やはり被災の対象になりまして、すぐに避難所に切り替わりました。ですから教職はほったらかして、その避難所のお世話をしていたようでございます。後ろ髪を引かれる思いで石巻から鳥取に赴任をしてこられました。実は彼も、アパートは海岸の近くだったものですから津波で流されてしまっただけで跡形もなかったとおっしゃっていました。たまたま、そのときは学校にいました。勤務中でありましたので助かった、ということだと思います。その彼が言っておられましたが、赴任してきて子どもたちと一緒に被災地の人たちを思いやる、そういう教育をやってみたくて言っていました。今、日本の中で大切なのは支え合うことだと思います。特に子どもの時分から、今日のテーマだと思いますが、そうして人と人とが支え合うことをしっかりと学び、体験をして。特に目の

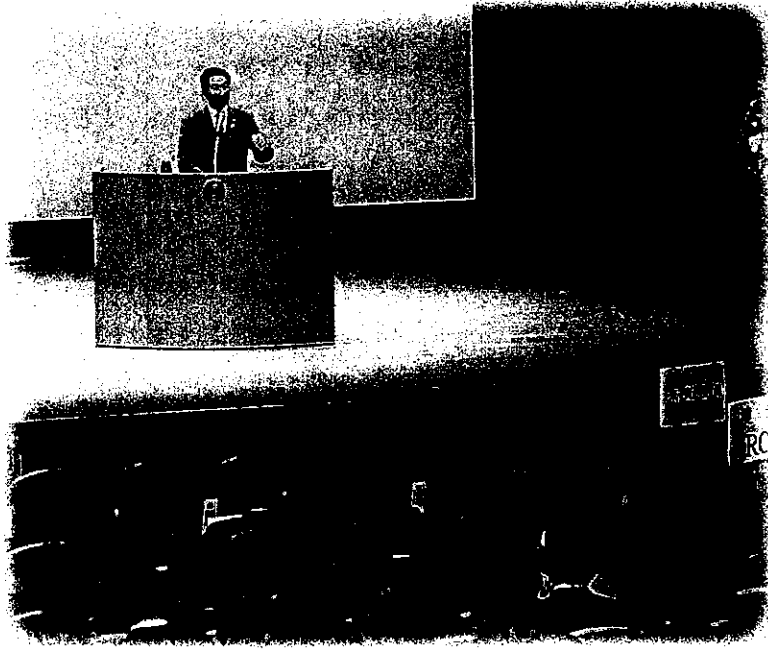


前で被災をし、その状況を見てきた先生がいるのは大きなことかと思えます。「是非やってくれ。」と申しあげました。また彼が、向こうで活動をしていて、うれしかったことが幾つかあった。一つは、石巻に最初に救助に来てくれたヘリコプターが鳥取のヘリコプターだった、と言っていました。これが現地で報道されたそうです。実は村井さんとも話をしたんですが、仙台空港をご存じだと思います。ああいう状況でございまして本来、救助活動に当たるべきヘリコプターが真っ先に津波で流されたわけです。だから、助けに行くヘリコプターがなくて、自衛隊も同じ状況であります。悔し涙を流している自衛官が映像に映っていました。そういう状況でございまして我々が応援に行ったんです。鳥取から翌朝ヘリコプターを飛ばして、山形空港から現地に入り救助活動をやりました。そういうことが現地でも報道されていたんです。彼は若桜かと思えますが、それが鳥取県の出身者として鼻高々だったと言っていました。その中学校は避難所ですが、またうれしかったのは、避難所に鳥取県から大量のうがい薬が届けられたと言っていたんです。実はそれが先ほど申しあげた、うがい薬です。

こうした避難者対策や災害対策は本当に必要なことを現場本位で考えていかなければいけないと思えます。今、私はこの国全体の災害対策を見ていて、どうも遠回りの気がするときがあります。政府も一生懸命やっておられるんだと思えますし、いろいろな方々が一生懸命やっておられるのは事実なんです。ただ伝言ゲームは凄く時間がかかるんです。例えば、こういう人材が欲しいということがありますと、それを順番に伝えてくると思うんです。どこかで全国一斉に、そういう横並び主義の役所主義に入りまして、それが入りますと、とつても、そこから先は時間がかかってくる。

実は自分自身も西部地震のときに経験したことがあるんです。これは随分、頭に来たんですが役所はこういうところがあります。西部地震でマグニチュード7.3で大揺れに揺れました。それで大変な被害が出て避難所をつくったんです。そのときに避難所の物資が足りない。ですから例えば、ストーブが必要だと言ったら、最初は危ないんでホッカイロで我慢してもらおうかなと言って、ホッカイロをかき集めたんです。ジャスコなどに電話すると結構あるんです。それを買って持っていくことをしました。それでも、やはり寒いということです。自衛隊に電話したら、米子の駐屯地から直ちに届けよと。さすが自衛隊だと思ったんですが、そういう経験がありました。そのときに、やはりトイレットペーパーがないんで、トイレットペーパーを持ってきてくれと話がありました。それで南部町の避難所に、トイレットペーパーを持っていこう。ただ、どこに頼んだらいいかと思ったら県には西部の総合庁舎がございまして。その西部の総合庁舎に役所で使うための買い置きのトイレットペーパーがあるんです。それをとりあえず急ぐんで車に乗せて全部持っていったんです。そうしたら夜中の3時過ぎになって鳥取にある県庁の災害対策本部から電話がかかってきて、向こうで大げんかをしていると。何かなと思って聞いたら、「トイレットペーパーを一体、何個持っていったのか報告しろ。」「そんなもん知らんわい。あるだけ持っていったんだ。」そんなことで、こんなことに時間を使うんだったら、もっと大切なことがある。結構そういうのはありました。やはり災害対策なんかは本当に必要なことを、どんどんやっていく事が必要だと思うんです。

鳥取県から今、向こう側に4人ほど連絡員を派遣しています。それから30人ほど、今、公務員を出して向こうに張り付けてやっています。女川では原発がございまして、あそこも津波が



結構ひどかったんです。あそこでは診療所が必要だということです。女川の病院があるんですが町立病院の1階が全部やられちゃったんです。それで医療機能が損なわれているので体育館に厚生病院と中央病院と、あとは鳥取大学の附属病院。この三病院の持ち回りで今、お医者さんと看護師さんを回して診療所を設営している。こんなことをやっているんです。そういうふうに現場に直接出して必要なことをどんどんやっていけばいいと思っています。ボランティアを募集をして、向こうに派遣しました。初回は28人に行っていただきました。帰ってきて報告会をしてもらいましたら、やはりどんどん出すべきだとおっしゃいます。それではと第2回を出そうと募集をしまして、あした出発します。2泊5日ですか、車中泊が2泊で、あと2泊が現地、そういうボランティアを出すことになります。この2泊5日のボランティアは45名いらっしゃる。やはり、行ってみようと言う人たちがどんどん増えてきています。こういう支え合うような、そういう心が必要だと思います。

今、この国のことを言うとかどうかと思うところがあります。「利によりて行えば怨み多し」と論語の言葉があります。結局、利害だけで政治

などをやるべきではないという戒めであります。そうすると結局、対立などの不協和音が起こってしまう。ひょっとすると最近の日本の情勢はそういうことだったかと思わざるを得ない時が、どうもございます。やはり論語の中で「政(まつりごと)を為すに徳を以てすれば、譬(たと)へは北辰の其の所に居て、衆星の之れに共(むか)うが如し」という言葉があります。政治を行うのに徳を持ってすれば、北辰というのは北極星です。北極星がその場において、周星、

すべての星、周りの星たちが、これに向かうがごとし。これを一つの中心として動くようなものだ。社会はそうやって動いていく。そういうたとえ話でございます。やはり、やる必要があることはわかっているのに、どうも余計なところに手足を取られてしまっている。そんな状況は本来、日本の目指しているものではないと思えてなりません。党派などの利害対立を乗り越えてやるべきことを、今、敢然としてやるべき時だと思います。本当の国難だと思います。こういう時にこそ、私たちは力を出していくべきです。

現実に私たちのところでは年末年始の雪害がありました。そのときにいろいろないいエピソードが生まれました。それは琴浦町や大山町の住民の皆さんが炊き出しをしたことであったり、『トイレはこちら』という祇園さんの看板が出てきた。そういうことで、いろいろな美談があります。子どもたちも動いてくれていたんです。例えば米子で高校生が雪かきをした。鳥取でも同じような話があった。そういうように子どもたちも役割を果たしていく。そういう体験の場にもなったと思います。いろいろなところからお礼のメッセージが届けられて、私たちは鳥取



の良さを再認識する機会にもなったんじゃないかと思います。ぜひ、こうした人を育てることを、これから鳥取県の中でやっていきたいと思っています。

私はこれからの鳥取県の4年間を見据えて未来づくりをすべきだと考えているんです。そのためには鳥取らしい顔が見えるネットワークをつくっていく必要があると思っています。例えば学者さんがいたり、企業の方がいたり、また病院の先生がいたり。いろいろな方々が地域社会の中に。ちょうど、このロータリアンの集まりのように顔が見えるネットワークがあって、私たちが共に力を出し合うことで地域の課題や子どもたちの育ちを保証していく。そういう時代をぜひとも作っていかねばいけないだろうと思うんです。それができるようになれば我々には真の競争力が生まれると思いますし、日本に今、欠けつつあるものが出てくるのではないかと考えているところであります。そのために、「人材・鳥取」という、人が宝の鳥取という姿を作りたいと思っています。いろいろと最近の子どもたちのことなどで気になることがございます。

人間の体はよくできたもので、ちゃんと高度

に発達するようにできているんです。ほかの動物たちとは大きく違うところがたくさんある。一つには、この前頭葉といいますか、大脳新皮質というところがあります。このキャパシティーが非常に大きい。ほかのお猿さんと比べても大きいということでもあります。これが社会性を生み出している。社会的動物であるという人間を支える。そういうものではないかと思っています。ただ、これも、放つといてできるものではないです。確かに人間には持って生まれた先天性の能力があるという説があります。なるほどと思いましたがギブソンという人が実験をした、生まれて間もないよちよち歩き、はいはいをする赤ん坊に母親が、おいでおいでをするのです。ただ、ここに絶壁があるんです。こう段差がある。その段差があるところにガラスを渡してある。そういうような仕掛けをしてあるんです。その、よちよち歩きをしてくる赤ん坊がいます。これにおいでおいでをする母親がいる。普通ならば、ずっと寄ってくるんですが絶壁がある手前で赤ん坊は止まるそうです。このことを発見をしました。人間には先天的に持って生まれたコントロールする能力がどうもあるようだ。なぜなら赤ん坊は絶壁から落ちたという学習経験

がありません。それなのに、その前で立ち止まるのは何らかのそういう能力があるんじゃないかと言われるのです。ただ、そればかりではないのです。むしろ圧倒的多数が後天的に体得をしてくる、学習をしてくるものでありまして、学習する動物であります。「学びて時にこれを習う、亦説(またよるこ)ばしからずや」と論語にもございます。それが人間の特性であると思います。生まれたばかりの赤ん坊





は人間の一生の中で一番、脳細胞が多い。ニューロンの数が多いのです。それがだんだんと淘汰(とうた)をされてくるのですね。人間の頭の回路、これはいわば、コンピュータでいうOSみたいなものです。これが発達段階に応じて、少しずつ整理をされてくる。ただ、全部を切り捨てるのではなくて、必要なものをここに組み込んでいくのです。これが非常に重要です。生まれた時には400グラムの脳細胞、脳の重さが、最終的に大人1,400グラムにまで行なります。何と7歳か8歳ぐらい。つまり学齢期に入り始めた、学童期のあたりで大体9割ぐらいの重さまで発達をします。いかに小さいときの子どもたちの育て方が重要かがそこから推察されると言われています。生まれてすぐから、だんだんと、特にシナプスという、ニューロンの間を伝達する、そういう物質がございます。こういうものがどんどんと増殖をしてくるんです。実は一秒間に30億個という大変なスピードで増殖する。いわばスパートをかけてくるのです。生まれた途端に人間はどんどん成長していこうとする。そのときに社会的動物になっていく。社会の中で暮らしていくための能力を発達させようと体が動いて行くのです。それが半年もたてば1,000兆個のシナプスになるんです。それがそのあと、だんだんと、また、これも淘汰を徐々にされてくる。大人になるころには半分ぐらいになってくるということです。こういうふうな発達段階があります。そのときに一番必要になるのは、いろいろな年齢層の人たちとコミュニケーションをする。外界からの刺激によってのみ、こうした脳細胞は発達をする。いわば刺激を与えられる、言葉をかけられる。それで反応することによって人間はだんだんと成長してくる。そういうものを体得してくるわけです。これが本来のメカニズムです。そのことをどうも最近忘れてい

るんじゃないかと思ひます。

私もよく職員と一緒にメディアスタート事業などにかかわろうと、いろいろリーダーシップを取らせていただいています。小さいころからテレビを見せる、あるいはテレビゲームをやらせる。そういう子育てになりつつあります。あれはよくないと言われていひます。話しかける。あるいはいろいろなことを想像させる。感情を持たせる。それが必要なんです。テレビは対話をしているようでいて実は対話でない。一方的な語りかけです。テレビゲームもそうだと思います。これはやはり学者さんが研究していると、テレビゲームも初めてやるゲームに取り組んだときは大変に脳細胞が活発に動くそうです。しかし、何度も繰り返してみますと、だんだん子どもはうまくなっていくんですが、実は子どもは、そのテレビゲームがうまくなってきて、ゴールに行くとか、クリアをすると言って喜んでいる頃になりますと、その時には、もう反射神経で動いているようなもんです。脳の回路はよくしたもので、最初はいろいろと判断するためにいろいろと脳を動かすわけですが、だんだん、こういうパターンで良いと分かってきますと省略をするのです。短絡回路をつくって、それだけで反応するもんですから、結局、脳を使っているようで使っていない。すなわち先ほど申し上げた子どもの育ちに役立つようなコミュニケーションの練習にはなっていないことです。子どもたちの発達段階でいくと、ちょうど幼児期のころに相手の心を読み取るという能力を備えるわけです。相手はこういうことを考へている。だから、私はこうしなければいけない。または、そういうような段階のときにテレビや、あるいはテレビゲームなどだけで子どもたちを育もうとしても、これは今までにないロボットのような人間ができてしまいかねないと思ひます。そこで鳥取県では、今、一生懸命やっておりますのはブックスタート事業など、



小さいときに、まず子どもさんに本を与えましょうと、境港市さんなどのいろいろなところで、そうした取り組みに共鳴してやっていただいております。あるいは学校でも朝読書をやる。これはおかげさまで全国のナンバーワンのところに来ていますが、こうした取り組みが必要なんです。そうしたことを、どんどんやりながら子どもたちの育ちを支えていくことが大切ではないかと考えております。これから4年間で学校の教育も変えていこうと思っているんです。

それは先ほど申しましたように、このロータリアンの集まりのような顔が見えるネットワークを子どもたちの育みに利用しない手はないだろう。特に今、申し上げましたように子どもたちに必要なのはいろいろな年齢層でいろいろな立場の人たちに語りかけられること。そして、願わくば、正統的周辺参加というんですが、オーソライズドされた、ちゃんと権限を与えられた、つまり子どもはお客さんとして、ここにいらっしゃいということではなくて、お祭りのときに、「君はこれをやりなさい。」「あれをやりなさい。」とそういう役割をきちんと大人と同じように与えて社会に参画をさせる。これが特に大切なことであります。そうした、いろいろな刺激と言いますか、教育的な効果もあるような働きかけを地域全体でやっていくべきではないだろうかと考えております。学校の改革もいろいろとやっていこうと、これまでも実はやってきました。この4年間で一番論争があったのが、教育関係で学力テストを公開すると言ったら、とんでもなく組合の方が騒がれましてキャンペーンを張られ、全国的にも有名な鳥取県になりました。そこを敢えて条例までつくって公開をしたんです。それとあわせて1億円かけた教育改革予算を作ったんです。それを学校に貼り付けて、学校教育の向上を図れとやってきたんです。例えば中学校の学力テストがございまし

たが平成19年、私が就任した時は大体、国語は25位か28位ぐらいだったです。それが今では10位台ぐらいまで上がってきています。国語、算数も、数学もそうではありますが、大体4年前よりも少し進歩をしてきております。こういうことで、今までも教育改革をやってきましたが、もっと進めるべきであろうと思います。

子どもたちの少人数学級も今の学年よりも拡大しようと考えておまして、市町村と一緒に進めたいと思っております。あと、もう一つは教育の中身のところです。ここを何とか変えていきたいと思っております。学校の先生のことではエキスパート教員を3倍に増やそうなどの取り組みを今、考えているんです。それとあわせて学校の中にボランティアとして、いろいろな形で入ってもらえないだろうかというアイデアを持っています。今、教育委員会と議論を始めたところでありまして6月の県議会かどこかで提案をしていきたいと思っております。ぜひ皆さまにもご協力をいただきたいと思っております。例えばアメリカの学校に行きますと、学校の中に100人ぐらいのボランティアが活躍をしているんです。花壇のお守りをする人や、あるいは学校の先生と一緒に採点をする人や、登下校の見守りをするガードマン役の人。いろいろな形でボランティアは入っています。なぜかという学校は地域で一番大切なところだからです。日本は得てして、ここ20年、30年の間、学校は学校で全てやってくれ。片方で、モンスターペアレントという言葉が生まれて、学校がうちの子どもを良くしないのはおかしいと言わんばかりの親すら出てきている。これは本末転倒でありまして、地域全体で子どもを育てるのが本来は日本の姿であり、先ほど申しましたような、いろいろな人との交流がなければいけないのですから、いろいろな形で、関わってもらったかどうかと思うんです。例えば学校の先生の



OBの方などもおられるでしょう。あるいは、自分はこういうことを教えられると言う人もいるでしょう。単純なボランティアとして、こういうことをやってみようかという人たちもおられると思うんです。そうした方々に支えていただいて、いろいろな顔が見えるコミュニティの空間としての学校はモデル的にもできないだろうか。そんな思いを持っております。ぜひ、また多くの方々にもご賛同いただいで、子どもたちの育ちを保証していただければ、ありがたいと思っております。

これ以外にも学校の改革として英語教育など、いろいろなメスを入れていきたいと思っております。そして、次世代の人材育成を図っていきたくて考えているところであります。「子曰く吾十有五にして学に志し」という言葉がございます。「三十にして立つ。四十にして惑わず」という、そうした人生観があります。こういう流れの中で行けば、「五十にして天命を知り、六十にして耳順がって、七十にして心の欲する所に従って、矩を踰えず」となるわけでありまして。人間はそううまくはいかないものであります。大体60、70になるとなかなか人の言うことを聞けなくなる人が増えてきます。ともかく「学に志し」という子どもたちの年齢、これはいつも普遍だと思えます。私の弟が調子に乗って、男の子が生まれたので、論語にしたがって学に志すと書いて志学という名前を付けました。後で後悔しなければいいがと思っているんです。そんなことで子どもたちは、ぜひ健やかな成長を地域全体でも支えていけたらいいと考えております。

いろいろな形でボランティア活動に子どもたちも参加をしてもらって、先ほど言った正統的周辺参加と

言われる状況を作っていきたいと思えます。

倉吉で感心したのは倉吉未来中心という建物が倉吉にできましたときに、倉吉未来中心のための未来ウォークというウォーキングができました。高校生などがボランティアで参加をします。また、中部で言えば日本海駅伝などのマラソンや駅伝があります。そうしたところでも子どもたちの姿が光るように見えるのです。ああいう体験活動が後々大きくなるんです。

今回も災害の関係で早速、被災地、東北の子どもたちなど、そうした人たちのために募金をしよう。また、つい、昨日は「親御さんを失われた、そうした子どもたちのために募金をしよう」と言って大学生や高校生が鳥取のジャスコで募金活動をしていた。そういうことが始まっています。大人たちが考える以上に子どもたちは次の時代の担い手としての準備を体の中で始めているわけでありまして。そういう場を社会全体でロータリーの皆さんでも始めていただいでいますが、いろいろな形をつくっていく必要があると思えます。

今回の大震災で南三陸町という津波で大きな被害のあった町がございました。この南三陸町で両親を失ったお子さんがいらっしゃいます。



これはあとで気が付いたんですが全国紙でも報道されておりました。お兄ちゃんと弟さんがいるんですが、弟さんが鳥取県に思い切って来られたんです。おばあちゃんがこちらにおられました。お兄ちゃんとは当時、涙の別れでこちらに来たのです。どうやって来たかといいますと、鳥取県から30人の公務員を派遣するようなバスを出しているんですが、そのバスに一人乗ってこちらに来たんです。ほかのメディアの方などには分からないように、ずっと逃がしてご親類に行っていたいたんです。お兄ちゃんは、当時は、まだお父さん、お母さんが見つかっていないので

現地に残らなければいけないと話をした。また将来の夢もありました。向こうで通っていた高校できっちり、そこでの勉強を仕上げてからという思いがあったようでありました。現地にとどまっています。弟さんはこちらに来られまして、新しいスタートを切りました。私も選挙中にその話に接しまして教育委員会で、ぜひ受け入れをしようと思いました。県立高校に今月7日から通い始めていらっしゃいます。前例はないんですが特別奨学金を出そうとさせていただきました。役所にそういう話をしたら、「前例がない。」と最初はだいたい反対をされました。今回の地震は前例がないんだからやろう、と私は言ったのです。そういうことで前例がない特別奨学金を出して、これから、そういう大変な境遇でこちらに来られた方には今後は出すことにしたのです。メッセージを平井伸治の名前で出させてもらったんです。県民の代表として投げかけをしました。そこには、「お父さん、お母さんがいなくなって大変ですね。避難所の暮らしも苦しかったでしょう。だけど、これからは鳥取県民、みんなが君の家族です。がんばって勉強して、



いつか古里に帰る日がきます。みんなで応援しています。」こう、したためさせていただきました。(会場から拍手) どうもありがとうございます。そうしたら、びっくりしました。選挙運動とは恐ろしいものでして、あるところに行ったら、そのご親類の方がいらっしゃいまして人混みの中から出てこられて、「この間、あのメッセージ、読ませてもらいました。」とおっしゃられて、因果はめぐるのだと思いました。今、国難の今だからこそ助け合う心で山陰らしく日本の中での役割を果たしていきたいと思えます。

ロータリーの皆さんには雪害のときも、そうでありましたが度重ねてのいろいろな災害のときに力を発揮していただきました。これから大きな日本の曲がり角だと思うんです。今、日本の中で鳥取みたいところが役割を果たさなければいけない。例えば今、いろいろな働きかけをしておりまして、経済の具合が悪いとの声が県内にもございます。明日は関係団体と意見交換をして、今の融資制度など以外にもやるべきことはあるだろうか。そのことを考えようか。先般もこのゴールデンウィーク向けに観光キャ



ンペーンをやろうと打ち出させていただいた。いろいろと動いています。やはり日本の中の役割を期待される、そういう空気も感じるようになりました。いろいろなパイプを通じてやっているんです。

ある大手系の企業さんの中には鳥取でぜひ、工場生産を、こちらのほうで生産するようにしてみたいという話も皆無ではございません。また流通などの動きで従来とは違った流通をさせるべきだという議論がわき起こったりしてきています。もちろん、いづれは東日本も復活をします。今、鳥取が頑張らなければならないのです。その力を出すと共に、それを担うべき次世代の人たち、これをしっかりと築いていかななくてはいけないと思います。

論語の言葉などで参考にしながら、これからの日本の姿や、子どもたちのことを考えようという、今日のテーマでございますけれども、ぜひとも皆さまにおかれましては大きな心で人を育てる。そういう役割もロータリーで果たしていただければと思います。「瓜食(うりは)めば子ども思うほゆ 栗食めば まして偲(しぬ)はゆ」、ということで始まりまして、「眼交(まなかひ)に もとな懸(かかり)て」ということでございまして、子どもの姿を思い出される。そういう山上憶良がこの倉吉近辺に赴任をして、もう既に1300年のときが経ちます。その言葉の中にもございましたように、「白銀も黄金も玉も何せむに勝れる宝子にしかめやも」でございまして。

皆さまには、ぜひ、子どもたちのためにも、また、なお一層のご奮闘をいただければありがたいと思います。「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」。ちょうど今、桜が散るような季節でございますが、百花繚乱のような、そういう賑やかな子どもたち、次世代の姿、鳥取県の姿を皆さまと共につくってまいりたいと思います。

この会のご盛會を心からお祝いを申し上げ、皆さまのご発展をお祈り申し上げます、私からのメッセージとさせていただきます。

どうもありがとうございました。